〈単語集 sözcük〉

コルトゥク koltuk〔名〕

（1）（肘掛け付きの）椅子、腰掛け

（2）脇、上座

（3）《慣用表現》koltuğa girmek「椅子に入る」（「結婚する」を表す）

koltuk çıkmak「椅子が出でる」（「支援する」を表す）

Büyük üzüntü içinde aynı acıyı paylaşmakla beraber depremden dolayı zor durumda olanların her biri için dua etmekteyiz.

今号の編集期間中にトルコで大きな地震が起きました。

一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

いきりっき　第三号〈コルトゥク〉

執筆｜今城尚彦・真殿琴子

デザイン・編集｜川野太郎

表紙写真｜今城尚彦

発行｜ Orcinus Orca Press

Instagram: @orcinusorcapress

Twitter: @kanko_1852

2023年3月4日　初版第1刷発行

とりあえず座る、そして｜真殿琴子

文章を書かなくなって以来久しい。ここ数ヶ月、エッセイはおろか、まともに原稿を書けずにいた。「いきりっき」というこの雑誌の原稿だけはなんとかやり遂げると強い想いだけは持っていたものの、いいアイデアが思いつかない。試しに何か書いてみても、独り言のようにぶつぶつと書いては、自分のトルコでの苦労話をぶちまけるだけになってしまい、嫌になって何度もボツにしていた。しかし三号は何としても出したい。年が変わる前に、本誌の編集をお願いしている友人の川野さんとトルコでの調査を終えて帰国したばかりの今城くんと上野公園で会って話した。三人が揃って対面で会うのは初めてだった。本誌もコロナ禍の産物のごとく生まれ、我々の繋がりもまた、これまではオンライン上で強化されてきたという経緯があった。夕日暮れなずむ上野公園の噴水の前で三人横並びに座って話し始めた時、次号は「座る」をテーマにしてみようかと誰かが言った（多分川野さんだ）。そのあと、トルコ語の oturmak は案外面白い単語だよねとトルコ語使い二人が意気投合したので、三号は「座る」をテーマにしようと決まったのだった。それからだいぶ間が空いてしまったが、「座る」から思い出したことをこれから少し書きたい。

トルコにいると友人などから「一緒に座ろう」とよく言われる。その「座る」に oturmak が使われている訳だが、意味としてはカフェなどで「席につく」そして「お茶する」、「おしゃべりする」、現代風に言うと「チルする」みたいなことを指す。こんなことを言うのは雑すぎるが、トルコの人々はつくづく座るのが好きだなと思う。人と会うということには、常に「座る」が含まれる。逆に言えば、人と一緒にいて座らないことがない。もちろん日本でも基本的にはそうなのだが、トルコ語の会話で oturmak が頻繁に使われることが私のこの雑なイメージに繋がっている。トルコにいると、社交の中心に「座る」とチャイ（あるいはコーヒー）があるような気がしてならない。「まあまあ座ってチャイでも飲んでけ」と言われるがままに席につくと、いつの間にか話に夢中になって、その場に釘で打たれたように動けなくなることがよくあった（楽しいが、時間はあっという間に溶ける）。「立つ」と「横になる」の間にある「座る」。考えてみると、この「座る」という姿勢こそ、人類が互いに話し、聞き、通じ合うことを支えてきたのではないか、とさえ思えてくる。私も場所を問わず、これまで実に多くの人たちと座り、交流してきた。その瞬間瞬間の目的は会話だったのか、「座る」こと自体だったのか。

椅子があるかどうかは特に重要ではない。友人たちとよくベランダで話した。外用の絨毯の上に、クッションか座椅子かを持ち出して腰掛けるスタイルが好きだった。場所も重要ではない。公園や砂浜、どこであってもアウトドアチェアを持って出かけて、お気に入りの場所を「座る」位置と定めることがあった。一回座ってしまえば、そこに魔法陣が敷かれたように瞬く間にくつろぎの空間と化すので不思議だった。チャイがあればなお良い。もっと言うと、ヒマワリの種があれば完全にトルコスタイルになる。なぜかいつもヒマワリの種なのだ。周りに合わせて素早くいくつも食べてるうちに塩っけのせいで舌が痺れてくる。なのに手は止まらない。今では懐かしく、どことなく可笑しい。

ある時、ここに座ろう、と友人が公園の片隅の芝生の上を指定してきたことを思い出す。「え、ここ？」と思うような場所だったので、何だか面白かった。友人曰く、地面に直に座ると「土になる」（topraklanmak）とのことだった。どうやらその表現は「土からエネルギーをもらう」みたいな意味らしい。私も靴を脱いで一緒になって座ってみることにし、友人の年頃の息子もそこに加わった。そして、スーパーで買ったサイダーを飲みながら、みんなでスナック菓子を分け合って食べた。その後も、その友人ことBさんは帰り道にまた突然車を停めて、「ちょっと行ってくる」と言って出て行った。ひとりターッと更地に行ったかと思ったら、その土の上にまたちょこんと座り始めた。そこはBさん一家がかつて住んでいたマンションの跡地であることは知っていたし、家が取り壊しになったと聞いた時は私もすごくショックだった。思い返してみれば、Bさんの飼い猫はよくマンションの下に降りたがった。頃合いになると調子をうかがうようにベランダから猫の名前を大声で呼ぶBさん。すると猫は松の木の下で「にゃあ」と返事する。私はその光景が愛おしくて大好きだった。それが今では松の木は一本も残されておらず、あの日常を再現できるものは何一つ見当たらない。Bさんは戻ってきてから、また「土になってた」と話し、時々こうするのだと言った。土と無言で対話するようにたたずむBさんの姿が忘れられない。その姿は過去と折り合いをつける儀式のようにも見えた。

とりあえず座ってみる。それから話は始まる。それがいつの間にか「落ち着く」になり、「居住する」にかわる。トルコ語の oturmak はこのいずれの意味も含む。私はなかなか書きたいものを書けずにいる。でも伝えたいことはたくさんある。誰かに聞いてほしい、わかって欲しい。とりあえず座ってチャイでも飲みながら。

頑張ってハユルと言う｜今城尚彦

「お前の良くないところは、ハユル（hayır, ノー）と言えないことだ」。これは去年二〇二二年、フィールド調査のためトルコの内陸部にあるハジュベクタシュという町に滞在していた時に、世話になっていた色々な人たちから何度も言われた言葉だ。ハジュベクタシュはトルコの少数派であるアレヴィーと呼ばれる人々にとって聖地とも言えるような場所であり、私はそこで十二ヶ月ほど住み込みで調査を行なっていた。

私は昔からものを断るのが苦手だった。アパートにやってきたコープの営業員に「ノルマがあるんです」と泣きつかれうっかり契約してしまったこともあれば、最近ではトルコで知り合った長年の友人から一緒に会社をやろうと持ちかけられ、危うく乗ってしまいそうになったこともあった。ただし現地での流れに身を任せることも重要だ。計画がうまく進まなくても、流れ流された先で出会ったものごとこそが既存の枠組みで捉えきれない事象である可能性もある、というのがフィールドワークの教科書的な説明だ。実際、現地で発生した偶然だけで論文が書けてしまったこともある。

こう書くともっともらしいが、人に振り回され続けるのは実に疲れる。なぜ私は「シュメール人の神は宇宙人であり、ハジュベクタシュは彼らが降り立った場所である」という聞きたくもない都市伝説を聞くために二〜三時間も公園に誘拐されなければならなかったのか。なぜ私は日本人をネタにした下品なコメディ番組を小一時間観ねばならなかったのか。ハジュベクタシュに野犬が多いからといって、「ここではお前は飢え死にしないな」などと極東人を馬鹿にした発言をなぜ浴びなくてはならないのか。

後からみれば、こうした経験も無駄ではなかったと思えることもある。しかし渦中にいるときの私はわりと本気で嫌な気持ちを味わっていた。私はただそこにいて起きたことを書き留めるだけの存在ではなく、ちゃんとそこに生きていて、痛みを感じたり悲しくなったりも怒ったりもする。なぜ私はこんなに我慢しているのか。調査を言い訳にして、嫌なことを嫌だと言えていないだけなのではないか。

この気持ちに折り合いがついたのは、初めて面と向かって人に「ハユル」と言った時だった。夏、ハジュベクタシュの人々は外に机を出し、隣人同士お茶を飲みながらおしゃべりに花を咲かす。私も毎晩のようにそうした集まりに呼ばれていた。ある日の夜にたまたま同席していたのがV氏であった。彼に研究テーマについて聞かれたので説明しようとしたが、彼は私の話には耳も貸さず「これこれの詩人は読んだか」「この作品は研究したのか」と問い詰めた。V氏が挙げた詩人については有名な詩を少し知っているだけだったので何も言えなかった。V氏は顔をしかめながら身を乗り出して「君は何もわかっちゃいない。今度お前にはこの道の真理を教えてやろう」と言い、席を立った。私の勉強不足とはいえ、なぜ初対面の人に話も聞いてもらえず頭ごなしに全否定されなければならないのか。さすがに理不尽だという気持ちが残った。

それから二日が経った日の昼間、家の呼び鈴が鳴った。上の階に住む大家さんがたまに様子を伺いに来るので彼かなと思って玄関に近づいた瞬間、私が開ける前にドアが乱暴な音を立てて開いた。「さあ座って話すぞ」と家に押し入ってきたのはV氏であった。「いえ、座りません。少なくとも家の中は困ります」と私は言った。ひとまず庭に置いてある椅子に誘導しながら、彼に帰ってもらうためには思っていることをはっきり言うしかないと思った。

「すみませんが、私はあなたが苦手です。この間『君は何もわかっちゃいない』とおっしゃいましたが、あなたの強引なやり方が『アレヴィーの道』の本質だとは思えません。」かなりはっきり言ったつもりだったがV氏には響いていなかった。「君にはまだこの知識の大事さがわからないだろうが、いつか聞いておいてよかったと思う時がくる」と彼は言った。そう言って私に構わず講釈を始めたが、よりによって彼はスーフィズムの理想的な人間像である「完全人間」（insan-ı kāmil）について語り始めたのだった。

どうして私は家に勝手に押し入ってきた人間から理想の人間について説教されなければならないのか。かなり我慢して聞いていたが、だんだんと荒唐無稽になっていく彼の話（建国の父であるムスタファ・ケマルが救世主のように到来すると予言した詩人がいた、など）に限界がきた。「どんなに価値のある知識も、それにふさわしい伝え方というものがあります。世界一美味しい最高級のお菓子を、目覚まし時計が鳴った瞬間に山ほど口に詰め込まれたら美味しいでしょうか。今日はあなたの話を聞けません。もう帰ってください。」

後になって「あれは慣習の違いだったのではないか、私が悪かったのか」などと思いもした。しかし大家さんは私の話に「あいつ、また来やがったのか。お前は確かに学生だが、研究者として敬意をもって俺たちの文化を学んでいるだろ。俺たちだってお前の文化に敬意を払わなくちゃいけない」と憤った。馴染みの食堂に来ていたお客さんも「お前Vを追い払ったのか、俺の義理の兄弟だけど全然気が合わないんだ」と大声で笑った。

この時初めて気づいた。彼に手を焼いていたのは別に私だけではなかったのだ。誰もがみんなと仲がいいわけではない。誰かに「ハユル」と言うことは彼らにとって自然な身振りで、だから喧嘩もする。人と真剣に付き合うなら、誰かと友達になると同時に「それ以外の人々」もできる。頑張ってハユルと言ったことで、彼らの人付き合いのあり方におけるそんな一面を垣間見た気がした。〈了〉